

正月の行事食に関する事例研究

名倉秀子

(帝京短大)

目的 食生活に非日常性を残す数少ない行事に正月がある。正月は本来新しい年神様を迎えて祭り、その年の豊穰と繁栄・幸福を祈る神祭りである。神様に供えた神饌を下げて、祝食するのが正月の食べ物であった。今日では、「とそ・おせち料理・雑煮」を中心に、家族とともに祝食しているが、これは元日のみとなっていることを報告してきた。ここでは、正月の行事を100年以上継続している旧家の様子を紹介し、事例分析を行うことにより社会的な変化との関連を検討した。

方法 本学学生を対象に、1995年より、元日の朝における食卓の風景を写真により調査した。その中から、数名に正月の食卓以外の儀式を質問し、旧家 H さんの家庭の行事を聞き取り調査した。また、資料・文献を収集し、あわせて分析した。

結果 新潟県岩船郡山北町にある H 家の正月の準備は12月28日のフルツキバライより始まり、大晦日に家屋の内外にある神様に膳を供え、元日は雑煮のある膳を供えていた。これらの膳は、お下がりとして家族で喫食していた。正月の行事食は、質素に行われていた。これらの行事は1940年台ころまで家長が中心となり執り行っていたが、現在では、家族にそれぞれ分散されていた。交通網の発達・就業状況など社会的な変化に伴ない正月の行事が一部簡略化されていた。